

「アゲハの前蛹(2)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

幼虫ともちがう、しかしサナギともちがう不思議な状態「前蛹(ぜんよう)」は、他の変態状態に比べると時期が非常に短く、意外にも観察のチャンスは少ない。私は虫カゴの蓋を縦位置にして、3年生教室(オープンスペース)の入口に置いておいた。



朝、登校してきた子どもたちは、さっそく気づいて覗き込むように観察していた。その不思議な姿に興味津々のようだった。

「何これ?サナギ?え、サナギじゃないか・・・」

「幼虫がサナギのかっこうして休んでるんだよ」

「えー、かわいい!もうすぐサナギになるのかな?」



子どもたちの予想通り、翌朝には「正式に」サナギに変身していた。わずか一日後に大変身をとげていた幼虫に、再び子どもたちは驚いていた。

「あ、サナギになってる!ほんとにサナギになった!」

「ちゃんと糸みたいので、体を支えてるね」

「すごい!きのうまで幼虫っぽかったのに、もう完全にサナギになっちゃった!」



確かにその通りである。本当にわずかな時間で昆虫は大変身する。もちろん親(成虫)が方法を教えるわけではなく、幼虫自身が「変身の時期と方法」をちゃんと知っているのだ。正しい時期に、正確にサナギになれるような遺伝子が、もともと組み込まれているのだろう。何度見ても不思議な変身である。



前蛹はサナギになる時に、もう一度「脱皮」をする。その「証拠」として、サナギの下に脱皮した殻が落ちていた。トンボの頭のような形で、一番硬い頭の部分がよく残っているのだろう。

【子どもの絵だより(絵日記)から】

「こないだ(このあいだ)、あげはのよう虫が、前よう虫になりました。よう虫のもようなのに、サナギのかっこうでした。ちょっとかわいいかんじがしました。つぎの日には、その前よう虫が、さなぎになりました。はや!って思いました」